

つなぎ、紡ぐ～思春期診療の現場から～



大阪府医師会理事

杉本 圭相

大学病院で思春期診療を担う中で、日々痛感するのは「思春期は未完成な心と身体が大きく揺れ動く時期」であるということです。身体の成長に加え、進学や人間関係、家庭の変化などが重なり合い、時に本人も周囲も対応に苦慮します。診療の場では、本人と保護者が異なる視点や期待を抱えて受診されることが多く、両者の葛藤をどのように受け止めるかが大きな課題となります。

私が日常診療で重視しているのは、医療的な評価や治療方針だけでなく、「沈黙や問いかけに込められた意味に耳を傾ける姿勢」です。思春期の子ども達は、自らの不安や葛藤を言葉にすることが得意ではありません。だからこそ、沈黙を否定せず、その奥にある感情や背景を推し量りながら対話を重ねることが大切です。その際、「HEADSSアセスメント（家庭・教育・活動・飲酒／薬物・性・自傷などの中から健康問題の原因を探る手法）」といった包括的な視点や、答えを急がずに状況を受け入れ、ともに耐える「ネガティブ・ケイパビリティ」の姿勢が有効であると感じています。しかし、医師1人が子どもを支えるには限界があります。学校の先生や養護教諭、保健師、心理士、さらには家族や地域の大人達が「伴走者」として関わる

ことで、子ども達の力を引き出します。その意味で、医師会活動も極めて重要な意義があります。医師同士の連携はもちろん、教育現場や行政との対話の場を紡ぐことで、地域全体で思春期の子ども達を支える仕組みを築くことができるためです。

診療現場では、拒食症や不登校、SNSを背景とした相談など、時代とともに多様な課題が持ち込まれます。その一方で、思春期の子ども達が持つ可能性や創造性は計り知れません。大人が一方向的に「導く」のではなく、問いかけと共感を通じて「未来をともに描く」姿勢が求められます。「つなぎ、紡ぐ」という言葉は、思春期診療の核心でもあります。本人と保護者、学校と医療、地域と社会——それぞれの立場の思いや声をつなぎ合わせていくこと。時に絡まり、時に途切れそうになる糸を丁寧に紡ぎ直すこと。それこそが、子ども達の未来を支える基盤になるのではないのでしょうか。

今後も医師会活動を通じて、こうした思春期の子ども達を地域全体で見守り、支えていく輪をさらに広げたいと考えています。大学病院の一勤務医として、そして同じ地域で子ども達と向き合う仲間として、皆さまとともに「つなぎ、紡ぐ」医療を築いていければ幸いです。